南の島から来た客

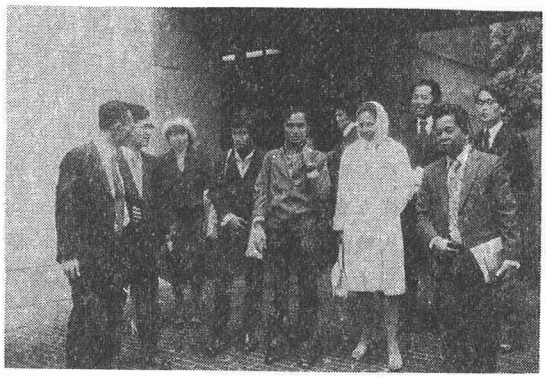
朽　津　耕　三（化学）

11月初旬のある日，学部長から連絡があって，イ　って欲しいとのお話であった。
ンドネシア大学の視察団が理学部を訪問するから会　一行は，理学部長と化学科主任（いずれもMrs.），

化学科の職員２名と学生３名（すべてMr.）で，国際交流基金のお世話により来日し，日本の大学を仙台から広島まで訪ねるので，まず東大から始めるとのことであった。

彼等は11月11日のあさ，部長室に現われ，植村先生，吉野事務長と私がまず出迎えた。みんな非常に人なつこい人たちだったので，すぐに親しくなった。職員の中には東工大に留学したことのある人がいて，日本語を話したり読んだり出来るのはその人だけのようであった。用意しておいた二，三の資料により，日本の教育制度の概要を説明し，東大とくに理学部における教育につき紹介したのがおもな話題で，彼等は終始熱心にメモをとっていた。彼等の質問からみて関心が強いと思われた事柄には，(1)われわれの入学試験制度，(2)卒業生の進路と就職状況，(3)理学部における国際人物交流，(4)化学の各分野での教育上の分担協力関係，などがあった。現在東大には，理科系の全学部・研究所にそれぞれ化学と直接または間接に関係ある教室・研究室がある。それらがどのように教育を分担し，研究連絡と協力をどのように行なっているか，という問題が(4)の内容である。単に“化学教室”といっても，その組織や規模は国により大学によって大幅に異なり，極端な場合には，東大の化学系のあらゆる教室をまとめて壮大なビルに結集したような化学教室を持つ大学もある。彼等の話によると，インドネシア大学の場合もややそれに近く，生化学・薬学・食糧化学・高分子化学などに対する関心が強いように見うけられた。石油化学に関する教育が重視されていると語っていたのも，土地柄によるものであろう。

昼近くなったので，三四郎池などで写真を撮ったりしながら赤門学士会館に行き，ここであらかじめ声をかけておいた化学教室のメンバー６名が加わった。荒田洋治助教授，秋葉欣哉講師，４年生の田中美智子，高林ふじ子，正田晋一郎，杉田教文の諸君である。どちらの学生たちも英語は相当上手で，食卓でにぎやかに話しあっていた。内容の大部分は食べ物のことだったらしい。来日直後にしては，われわれの淡白な料理にもとまどう様子は見られなかった。（昨年アムステルダムに行ったとき，インドネシア料理店が多いのに驚いた。香辛料がよく利いた南国独特の味は，いまだにオランダ人に愛好されているのだろうか。）



午后は化学教室に来てもらった。化学科の学部・大学院におけるカリキュラムを説明したのち，授業中の講義室，図書室，実験室を案内した。学生実験室の配置や，図書室におかれた電算機による情報検索にとくに興味を持ったようである。実験机の寸法を測ってメモをとったりしていた。あとの予定が詰まっていたために，最後は慌ただしく別れることになってしまった。もう少し時間があれば，研究室をもっとよく見せたり，彼等の大学の話をもっと詳しく聞けたのにと残念だった。

学生たちは化学の懸賞論文に入賞し，その御褒美の旅行だったそうである。おそらく，われわれがテレビのクイズを正解してハワイに行くよりはずっと難しかったことだろう。それだけに，彼等はみんな好青年だった。こちらの学生諸君に，奨学金，寮，カウンセリングのことなどをいろいろと質問し，将来は教職につきたいと語っていたそうである。文献が日本とちがって入手しにくいので，コピーを送って欲しいと頼まれた人もいた。

彼等はお土産にインドネシア大学の小さな旗を残していった。化学教室の事務室に置かれたこの旗を眺めながら，いつか東大の旗をもってジャカルタを訪ね彼等に再会する日があるだろうかと考えている。